学校だより　令和４年６月 29 日

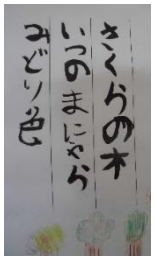
夢中がいっぱい左近山の子

横浜市立左近山小学校 Sakonyama

～つながる学び（知）・つながる仲間（徳/体）・つながる地域・未来(公/開)～　７．８月号

一粒一粒　こつこつと

校 長　徳留　勇



登校すると、真っ先に朝顔の植木鉢の所に集まり、「校長先生、芽が4つでたよ。」と嬉しそうに報告をしてくれる１年生。「きゅうりの先に黄色い花がついていたよ。」「ミニトマトのわき芽ってどれですか？」「この枝豆、もうとってもいいかな？」「このきゅうりをお母さんにも見てもらうの。」と、畑の野菜の様子を細かく観察し、お世話の仕方を学びながら生長を喜ぶ2年生。 算数の時間、積極的に手を挙げ、意見を発表するだけでなく、友達と考えを伝え合い、よりよい考えを導こうとする高学年。各教室の廊下には、子どもたちの才能と頑張りがつまった素敵な作品がたくさん掲示されています。

新年度になって、3か月。子どもたちは、日々のがんばりを積み重ね、少しずつ成長しているのだなと感じさせられています。

子どもたちの日々の積み重ねの大切さを考えた時、江戸時代に活躍した新井白石にまつわる「一粒の米」の話を思い出したので紹介いたします。

子どもの頃、新井白石は、あまり勉強をせず、遊んでばかりいたそうです。そんな白石の様子を見て、ある日、お父さんが白石を呼んで一粒の米を見せて、こんな話をしたそうです。

「この一粒の米を、大きな米びつの中から取りだしても、取ったかどうかはわからない。 しかし、毎日一粒ずつ取ったらどうなるだろう。 いずれ少なくなったことがわかるだろう。 同じように、一粒だけ米粒を入れたとしても、増えたかどうかわからない。でも、毎日一粒ずつ入れ続けると増えたことがはっきりわかるようになる。

これと同じことが白石の勉強や習い事にも言える。一日だけ勉強したり、習いごとをしたりしても、すぐに賢くなったり、上手になったりするものではない。逆に、一日怠けたからといって、すぐにわからなくなったり、下手になったりするわけでもない。

ところが、毎日、ほんの少しでも努力を続けると、１年後には、利口になったり、上手になったりしたことがよく分かる。

逆に、毎日、勉強しなかったり習いごとをしなかったら、いつの間にかわからなくなったり、下手になったりしてしまう。

毎日、勉強や習い事をしていた人と、そうでない人では、大きな差がついてしまうのだ。」

父親の話を聞いて、白石は一粒の米粒をお守りとして机の上に置き、怠け心がでたときに、その米粒を見て自分を励まし、努力を重ねたのだそうです。

桜の木が変化するように、子どもはいつのまにやら成長していくものです。でも、よりよい成長を応援するためには、子ども自身も気付いていないかもしれない頑張りを認める何気ない励ましの大切さを、我々大人は改めて意識する必要があるのだと思います。

また、子どもたちには、努力をしたからといって、すぐに結果を求めず、小さな米粒を、一粒一粒、自分の中に蓄えていこうとする気持ちを大切にしてほしいと考えます。 焦らず、急がず、あきらめず、毎日をこつこつ頑張ってきてよかったなという喜びを実感できる、そんな子どもたちに育ってほしいと心から願っています。

７月２１日からは、子どもたちが楽しみにしている夏休みです。39日間、いつもとは違った特別な米粒を、一粒一粒、自分の中に蓄えられるよう、有意義な日々を送ってほしいです。